

看護学教員の日々の実習指導計画の実施を 阻害する要因

湯澤香緒里¹⁾，松田安弘²⁾，山下暢子²⁾，服部美香²⁾

1) 群馬パース大学

2) 群馬県立県民健康科学大学

原 著

看護学教員の日々の実習指導計画の実施を阻害する要因

湯澤香緒里¹⁾, 松田安弘²⁾, 山下暢子²⁾, 服部美香²⁾

1) 群馬パース大学

2) 群馬県立県民健康科学大学

目的：看護学教員の日々の実習指導計画の実施を阻害する要因を明らかにし、日々の実習指導計画の実施を阻害する要因となる事象に遭遇しやすい状況を考察する。

方法：実習指導を担当する教員623名を対象とし、質問紙法を用いてデータを収集した。データ分析には、Berelson, B.の方法論を参考にした看護教育学における内容分析を用いた。

結果：303記録単位を分析した結果、【援助実施に必要な学生の準備状態不足】、【クライアントの状態変化】、【学生が予定していた援助実施への実習指導者からの許可獲得不可】、【感染源との隔離に向けた学生とクライアントの接触機会制限の必要性発生】など教員の日々の実習指導計画の実施を阻害する要因を表す36カテゴリが形成された。

結論：教員の日々の実習指導計画の実施は、《授業成立要件の未充足》、《学習機会確保に向けた看護師からの支援獲得困難》などの状況の中で阻害されやすい。

キーワード：看護学実習、看護学教員、実習指導計画

1. 緒 言

近年、看護職者には、様々な場面において人々の身体状況を観察・判断し、状況に応じて適切に対応する看護実践能力が求められている¹⁾。これに応えるためには、学生の看護実践能力の育成が必要であり、看護実践の場に学生が身を置き、看護職者の立場でケアを行うことを通して学習する看護学実習（以下、実習と略す）の充実が不可欠である²⁾。

実習とは、学生が既習の知識と技術を基に、クライアントと相互行為を展開し、看護目標達成に向かいつつ、そこに生じた看護現象を教材として、看護実践に必要な基礎的能力を修得するという学習目標達成を目指す授業である³⁾。また、授業とは、相対的に独立した学習主体としての学習者の活動

と教授主体としての教授者の活動が相互に知的対決を展開する過程であり、その過程は教育目標の達成を目指し、目的적、計画的に展開される⁴⁾。すなわち、実習の充実に向けて、看護学教員（以下、教員と略す）には、学生が実習目標を達成できるよう、学生個々への指導を目的적、計画的に行うことが求められる。

実習は、数週間の実習期間を通して行われることが多い。そのため、実習の指導計画には、週ごとの指導目標や指導内容を計画する週単位の指導計画と、日々の具体的な指導内容や指導方法を計画する日単位の指導計画⁵⁾がある。教員の学生個々への日々の実習指導は、主に日単位の指導計画に基づき展開される。しかし、教員は、実習中に指導計画の実施を阻害される状況に幾度となく遭遇し、その都度、指導計画の変更を行いながら

実習指導を展開している。以下の研究結果がこれを示唆する。

実習中の教員の教授活動に関する研究^{6,7)}は、教員が実習目標達成に向けて、病棟状況の変化により指導計画を変更する、看護現象の生じている状況に応じて指導方法を転換する、指導効果の確認により指導内容を修正するという行動を示すことを明らかにしていた。これは、実習指導を行う教員が、病棟や学生の学習などの状況により、指導計画の実施を阻害され、指導計画を変更していることを示す。また、教員の実習指導上の困難に関する研究⁸⁾は、教員の実習指導が困難になる学生側の要因に、学生の心理状況や看護技術修得状況、学生と患者の関係性などがあることを明らかにしていた。これは、学生の心理状況や看護技術修得状況、学生と患者の関係性などが、指導計画の実施を阻害する要因の一部である可能性を示す。これらの研究結果は、教員が、日々の実習指導計画の実施を阻害する要因となる事象に遭遇しながらも、柔軟に指導計画を変更し、学生の実習目標達成を支援していることを示唆する。しかし、教員の日々の実習指導計画の実施を阻害する要因の全容は解明されていない。

以上を前提とし、本研究は、教員の日々の実習指導計画の実施を阻害する要因を明らかにすることを目指す。本研究の成果は、実習指導を担当する教員が、指導計画の実施を阻害する要因となる事象に遭遇することを考慮した指導計画の立案や、指導計画の実施を阻害された際の柔軟な指導計画の変更に活用可能な知識となりうる。

Ⅱ. 研究目的

教員の日々の実習指導計画の実施を阻害する要因を明らかにし、日々の実習指導計画の実施を阻害する要因となる事象に遭遇しやすい状況を考察する。

Ⅲ. 用語の概念規定

1. 日々の実習指導計画

(daily practicum teaching plan)

実習指導計画とは、実習目標の達成に向けて、学生の適切な学習活動を組織し、各々の学生が実習目標を達成するまでの教員による一連の教授活動の計画である。これを前提とし、日々の実習指導計画を、「学生の適切な学習活動を組織し、学生個々が実習期間を経て、実習目標達成できるように、教員が立案する実習1日の教授活動の計画」と規定する。

2. 実習指導計画の実施を阻害する要因

(factors that inhibit the implementation of practicum teaching plan)

実習指導計画の実施を阻害する要因とは、実習指導計画の実施が妨げられる状態を引き起こす原因である。

Ⅳ. 研究方法

1. 研究対象者

2年課程通信制短期大学と2年課程通信制専門学校を除く、看護基礎教育課程を提供する大学、短期大学、専門学校に所属し、実習指導を担当している教員を対象とした。

2. データ収集

次の通り、教員623名に質問紙を配布した。基礎教育課程の種類と都道府県を層化変数とする層化無作為抽出法を用いて206施設を抽出し、教育管理責任者に研究協力を依頼した。承諾の得られた教育管理責任者に、対象者623名分の研究協力依頼状、質問紙等を送付し、配布を依頼した。

データ収集に用いた質問紙は、教員の日々の実習指導計画の実施を阻害する要因の具体的内容と

対象者の特性を問う選択回答式質問と自由回答式質問、実数記入式質問から成る。日々の実習指導計画の実施を阻害する要因を問う質問は、指導計画の実施を阻害された経験を想起し回答できるように、次のように作成した。問1は、指導計画の実施を阻害された経験の有無を明確にする選択回答式質問を設定した。質問文は、「あなたは、最近担当した実習で、前日あるいは当日の朝に計画した個々の学生への実習指導を予定通り実施できなかったことはありますか」とした。問1に「ある」と回答した対象者に、その場면을想起してもらい、指導計画の実施を阻害する要因に関する記述を求める自由回答式質問として問2を設定した。質問文は、「予定通りに指導が実施できなかった場面を思い出し、以下の問いにお答えください」とし、想起した場面の指導計画の内容と阻害要因を記載できるように、「どのような指導を行おうとしていましたか」と「なぜ、その指導を予定通りに行えなかったのですか」という質問文と回答欄を設けた。また、1枚の質問紙に、指導計画の実施を阻害された場面2つを記載できる欄を設けた。質問紙の内容的妥当性は、専門家会議とパイロットスタディにより確保した。

データ収集期間は、2017年4月20日から8月31日であった。

3. データ分析

Berelson, B.の方法論を参考にした看護教育学における内容分析⁹⁾を用いて分析した。分析の際は、研究のための問いを「教員の日々の実習指導計画の実施を阻害する要因はなにか」と設定し、この問いに対する回答文を「教員の日々の実習指導計画の実施を阻害する要因は、()である」と設定した。

自由回答式質問に対する回答のうち、各教員の指導1場面の記述全体を文脈単位とし、設定した研究のための問いと問いに対する回答文を確認し

ながら、「日々の実習指導計画の実施を阻害する要因」を表す1内容を含む記述を1記録単位とした。分析対象となる記録単位のうち、意味内容の類似した記録単位を集約し、同一記録単位群とした。次に、個々の同一記録単位群を意味内容の類似性に基づいて分類し、その記述を忠実に反映したカテゴリネームをつけた。最後に各カテゴリに包含された記録単位の出現頻度を数量化し、カテゴリ毎に集計した。

対象者の特性は、Microsoft Excel 2013を用いて記述統計量を算出し把握した。

カテゴリの信頼性は、2名の研究者によるカテゴリ分類への一致率をScott, W.A.の計算式¹⁰⁾を用いて算出し確認した。

4. 倫理的配慮

本研究の全過程において、対象者の自己決定の権利と匿名性、秘密保持に関する権利や研究不正行為回避の保障を遵守した。教育管理責任者には、対象者が自由意思に基づき研究協力が決定できるような配慮を求め、対象者には、研究目的と意義、倫理的配慮などを説明した。質問紙の回収は個別投函とし、自己決定の権利と個人情報保護を保障した。

本研究は、群馬県立県民健康科学大学倫理委員会による承認（健科大倫第2016-39号）を得たのちに実施した。

V. 研究結果

研究協力で承諾が得られた71施設（質問紙配布協力受諾率34.5%）に所属する教員623名に質問紙を配布し、268名から返送があった（回収率43.0%）。このうち、日々の実習指導計画の実施を阻害された経験があると回答した者は171名（63.8%）であった。日々の実習指導計画の実施を阻害された経験があると回答した171名すべて

が実習指導計画の実施を阻害する要因を問う自由回答質問に回答していた。

1. 対象者の特性

対象者 171 名の担当する専門領域は、基礎看護学 36 名 (21.1%)、成人看護学 44 名 (25.7%)、老年看護学 19 名 (11.1%)、母性看護学 21 名 (12.3%)、小児看護学 23 名 (13.5%)、精神看護学 11 名 (6.4%)、地域看護学 2 名 (1.2%)、在宅看護論 8 名 (4.7%)、その他 3 名 (1.8%)、不明 4 名 (2.3%) であった。また、教員経験年数は、1 年未満から 28 年の範囲であり、平均 8.9 年 (SD 7.6) であった。その他の特性は、表 1 の通りであった。

2. 教員の日々の実習指導計画の実施を阻害する要因

対象者 171 名の記述は、274 文脈単位、372 記録単位に分割できた。この 372 記録単位のうち 69 記録単位は、教員の日々の実習指導計画の実施を阻害する要因を記述していなかった。要因の具体的な内容が記載されている 303 記録単位を分析した結果、「教員の日々の実習指導計画の実施を阻害する要因」を表す 36 カテゴリが形成された (表 2)。

以下、36 カテゴリを、記録単位数が多いものから順に各カテゴリを形成した代表的な記述を用いて説明する。なお、要因を表すカテゴリは【 】を用いて表す。

表 1 対象者の特性

n = 171

項 目		項目の範囲・種類・度数・平均・標準偏差・百分率		
専門領域	基礎看護学	36 名 (21.1%)	精神看護学	11 名 (6.4%)
	成人看護学	44 名 (25.7%)	地域看護学	2 名 (1.2%)
	老年看護学	19 名 (11.1%)	在宅看護論	8 名 (4.7%)
	母性看護学	21 名 (12.3%)	その他	3 名 (1.8%)
	小児看護学	23 名 (13.5%)	不明	4 名 (2.3%)
教員経験		0 年から 28 年	平均 8.9 年 (SD7.6)	
教育機関種類	大学	59 名 (34.5%)	専門学校 (2 年課程)	30 名 (17.5%)
	短期大学	2 名 (1.2%)	専門学校 (3 年課程)	79 名 (46.2%)
			不明	1 名 (0.6%)
教育機関所在地域	北海道	2 名 (1.2%)	近畿	17 名 (9.9%)
	東北	14 名 (8.2%)	中国・四国	19 名 (11.1%)
	関東・甲信越	89 名 (52.0%)	九州・沖縄	12 名 (7.0%)
	東海・北陸	17 名 (9.9%)	不明	1 名 (0.6%)
臨床経験		3 年から 35 年	平均 12.3 年 (SD7.5)	
年 齢		27 歳から 75 歳	平均 46.8 年 (SD9.1)	
性 別	女性	159 名 (93.0%)	男性	12 名 (7.0%)

表2 「看護学教員の日々の実習指導計画の実施を阻害する要因」を表すカテゴリと記録単位数

カテゴリ		記録単位数(%)
1	援助実施に必要な学生の準備状態不足	46 (15.2%)
2	クライアントの状態変化	34 (11.2%)
3	他学生への実習指導優先	33 (10.9%)
4	実習指導内容に関する学生の実習記録不十分	22 (7.3%)
5	実習指導受理困難な学生の心身の状態	21 (6.9%)
6	実習指導の前提となる内容の学生の学習不十分	17 (5.6%)
7	学生が予定していた援助実施への実習指導者からの許可獲得不可	16 (5.3%)
8	学生が予定していた援助実施・看護実践場面見学のクライアントや家族からの拒否	14 (4.6%)
9	実習指導予定時刻を超過した学生の学習活動継続	12 (4.0%)
10	クライアントの予定外の退院	9 (3.0%)
11	他教員や実習指導者による実習指導への予期せぬ介入	7 (2.3%)
12	学生が予定していた援助実施・看護実践場面見学の看護師による先行実施	5 (1.7%)
13	実習指導内容に対する学生の言動稀薄	5 (1.7%)
14	実習指導者への依頼不十分による学生が予定していた援助実施・看護実践場面見学不可	5 (1.7%)
15	予定していた実習指導内容よりも優先すべき指導内容発生	5 (1.7%)
16	実習指導に向けた学生の準備状態査定不十分	5 (1.7%)
17	教員や学生の実習施設への到着遅延	4 (1.3%)
18	学生が予定していた援助と異なるクライアントや家族からの要望優先	4 (1.3%)
19	クライアントの検査・治療と学生が予定していた援助実施の時間重複	4 (1.3%)
20	学生からの実習指導拒否	4 (1.3%)
21	学生が見学を予定していたクライアントの治療時間変更	4 (1.3%)
22	学内での対応が必要な突発的事態発生	3 (1.0%)
23	実習指導者多忙による学生が予定していた実習指導者との援助実施・看護実践場面見学不可	3 (1.0%)
24	感染源との隔離に向けた学生とクライアントの接触機会制限の必要性発生	3 (1.0%)
25	実習指導計画に対する上司や実習指導者からの承認不可	3 (1.0%)
26	学生へのクライアントのセクシュアルハラスメント	2 (0.7%)
27	想定していた実習指導場所確保不可	2 (0.7%)
28	実習指導に活用可能な教材入手不可	2 (0.7%)
29	学生の受け持ちクライアント未選定	2 (0.7%)
30	学生が見学を予定していたクライアントの行動完了	1 (0.3%)
31	実習指導者の助言時間延長による学生への実習指導時間確保不可	1 (0.3%)
32	学生の自己判断による援助の先行実施	1 (0.3%)
33	看護師多忙による学生と看護師の相互行為不可	1 (0.3%)
34	学生の関与したインシデントへの対応	1 (0.3%)
35	他学生の体調不良への対応	1 (0.3%)
36	学生のクライアントとの相互行為敬遠	1 (0.3%)
記録単位総数		303 (100.0%)

* 構成比は、小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計しても100にはならない

【1. 援助実施に必要な学生の準備状態不足】は、「学生が患者指導用パンフレットを書き終えていなかったこと」などの記述から形成された。

【2. クライエントの状態変化】は、「学生が足浴しようとした時、患者が心筋梗塞を発症したこと」などの記述から形成された。

【3. 他学生への実習指導優先】は、「他の学生のほうが指導の必要性の優先順位が高かったこと」などの記述から形成された。

【4. 実習指導内容に関する学生の実習記録不十分】は、「学生が実習記録そのものを記載していなかったこと」などの記述から形成された。

【5. 実習指導受理困難な学生の心身の状態】は、「アセスメントの記載方法を指導していた学生が泣いてしまったこと」などの記述から形成された。

【6. 実習指導の前提となる内容の学生の学習不十分】は、「問題点の抽出の指導を予定していた学生が情報のアセスメントができず問題を抽出するまで行えていなかったこと」などの記述から形成された。

【7. 学生が予定していた援助実施への実習指導者からの許可獲得不可】は、「実習指導者が前日と異なり、その実習指導者から学生が立案した看護計画を実施する許可が出なかった」などの記述から形成された。

【8. 学生が予定していた援助実施・看護実践場面見学のクライアントや家族からの拒否】は、「患者から受け持ちをやめて欲しいと言われたこと」などの記述から形成された。

【9. 実習指導予定時刻を超過した学生の学習活動継続】は、「学生がずっと患者のベッドサイドに行ったままでナースステーションに帰ってこないこと」などの記述から形成された。

【10. クライエントの予定外の退院】は、「学生が退院指導をしようと計画していた患者が週末予定外に退院していたこと」などの記述から形成された。

【11. 他教員や実習指導者による実習指導への予期せぬ介入】は、「実習指導者から、直接、学生の技術の指導を行いたいと言われたこと」などの記述から形成された。

【12. 学生が予定していた援助実施・看護実践場面見学の看護師による先行実施】は、「学生が沐浴を予定している受け持ちの新生児であることを表示していたにも関わらず、実習病棟の看護師が沐浴を済ませていたこと」などの記述から形成された。

【13. 実習指導内容に対する学生の言動稀薄】は、「学生の本音や感じたことがあまりカンファレンスで出てこなかったこと」などの記述から形成された。

【14. 実習指導者への依頼不十分による学生が予定していた援助実施・看護実践場面見学不可】は、「教員の清潔援助を担当する看護師への学生との援助実施の依頼の仕方が十分ではなかったこと」などの記述から形成された。

【15. 予定していた実習指導内容よりも優先すべき指導内容発生】は、「学生が日常生活援助を実施するための技術手順等の不足を先に指導する必要が生じたこと」などの記述から形成された。

【16. 実習指導に向けた学生の準備状態査定不十分】は、「教員が、学生の患者を目の前にした時のコミュニケーション能力を見誤っていたこと」などの記述から形成された。

【17. 教員や学生の実習施設への到着遅延】は、「学生の到着が遅かったこと」などの記述から形成された。

【18. 学生が予定していた援助と異なるクライアントや家族からの要望優先】は、「患者がシャワー浴を希望したため、清拭からシャワー浴介助に変更となったこと」などの記述から形成された。

【19. クライエントの検査・治療と学生が予定していた援助実施の時間重複】は、「学生がシャワー浴を予定していた時間に患者の検査がはいっ

たため、時間調整をしたが、実習時間内にシャワー浴を組み込むことができなかったこと」などの記述から形成された。

【20. 学生からの実習指導拒否】は、「学生が他の教授の指導を受けたと言い、助言を拒否したこと」などの記述から形成された。

【21. 学生が見学を予定していたクライアントの治療時間変更】は、「学生の受け持ち患者の回診時間に変更があったこと」などの記述から形成された。

【22. 学内での対応が必要な突発的事態発生】は、「急遽、臨時の教務会議を実施せざるを得ない状況が起こったこと」などの記述から形成された。

【23. 実習指導者多忙による学生が予定していた実習指導者との援助実施・看護実践場面見学不可】は、「看護師と患者の関わりを観察する同行実習時、実習指導者が病棟業務との兼務で多忙のため、病棟業務優先であり学生が同行できなかったこと」などの記述から形成された。

【24. 感染源との隔離に向けた学生とクライアントの接触機会制限の必要性発生】は、「患者のインフルエンザ疑いの突然の発熱のため、学生の患者への接触機会を最小限にする必要があったこと」などの記述から形成された。

【25. 実習指導計画に対する上司や実習指導者からの承認不可】は、「大学の上司から当該学生が他学生の受け持つ患者の観察を実施する同意が得られなかったこと」などの記述から形成された。

【26. 学生へのクライアントのセクシュアルハラスメント】は、「学生に対する患者からのセクシュアルハラスメント行動未遂」などの記述から形成された。

【27. 想定していた実習指導場所確保不可】は、「学生を指導する場所を確保することが困難であったこと」などの記述から形成された。

【28. 実習指導に活用可能な教材入手不可】は、「学生の病気・社会制度の知識不足を補うための

実習先の教材不足」などの記述から形成された。

【29. 学生の受け持ちクライアント未選定】は、「予め1名の学生に対し2名の患者選定を依頼していたが、実習病棟で患者選定してもらえなかったこと」などの記述から形成された。

【30. 学生が見学を予定していたクライアントの行動完了】は、「授乳場面を見学する予定であった学生が休憩時間中に授乳になってしまったこと」の記述から形成された。

【31. 実習指導者の助言時間延長による学生への実習指導時間確保不可】は、「カンファレンスで臨床指導者が長い長い意見をしてくださったため、教員が指導をする時間がなくなったこと」の記述から形成された。

【32. 学生の自己判断による援助の先行実施】は、「学生が長期の休みに病院で看護補助者として勤務しており、その体験のままで術後ベッドを作成してしまったこと」の記述から形成された。

【33. 看護師多忙による学生と看護師の相互行為不可】は、「担当看護師と患者への援助をするために看護師への報告内容や報告時期を学生に指導しようとしたが、担当看護師の業務が忙しいため、学生が担当看護師に関わるができなかったこと」の記述から形成された。

【34. 学生の関与したインシデントへの対応】は、「学生のインシデントの発生により大学と臨床側で対応についての協議に時間をとられたため」の記述から形成された。

【35. 他学生の体調不良への対応】は、「担当していた別の地域の行政機関で実習をしている学生が体調不良のため、対応が必要であったこと」の記述から形成された。

【36. 学生のクライアントとの相互行為敬遠】は、「泣き叫ぶこどもに対して、どのように接したらよいかわからないため、学生が泣き叫ぶこどものそばに行きたがらないこと」の記述から形成された。

3. カテゴリの信頼性の確認

看護教育学研究者2名による、カテゴリ分類への一致率は、90.4%、90.4%であり、36カテゴリが信頼性を確保していることを示した。

VI. 考 察

本研究の結果は、教員の日々の実習指導計画の実施を阻害する要因を表す36カテゴリを明らかにした。この36カテゴリと文献を照合し、教員の日々の実習指導計画の実施を阻害する要因となる事象に遭遇しやすい状況を考察する。また、この状況への対処に向けて重要な教授活動の示唆を得る。

教員の日々の実習指導計画の実施を阻害する要因36カテゴリのうち、その要因となる事象に遭遇しやすい状況を明らかにするために、第1に、実習指導を受ける学生に関連していると推測される、【5. 実習指導受理困難な学生の心身の状態】【13. 実習指導内容に対する学生の言動稀薄】【20. 学生からの実習指導拒否】に着目した。実習は、授業形態の一つであり、授業とは、相対的に独立した学習主体としての学習者の活動と教授主体としての教授者の活動とが相互に知的対決を展開することである¹¹⁾。【5】【13】【20】は、教員が知的対決の展開を試みたものの、学生の知的対決を展開する準備が整っていない状況の中で生じた要因である可能性を示す。

学生の準備に関連して、【6. 実習指導の前提となる内容の学生の学習不十分】【4. 実習指導内容に関する学生の実習記録不十分】に着目した。学生と教員が相互に知的対決を展開するためには、学習活動の主体者である‘学生’、教授活動の主体者である‘教員’、クライアントの提示する現象や看護師の看護実践などの‘教材’という授業成立の要件¹²⁾の充足が不可欠である。学生は、授業成

立に向け、教員から提示された課題に沿って学習への準備状態を整えておく必要がある¹³⁾。これらは、【6】【4】が、学生の授業への学習準備状態が不十分な状況の中で生じた要因である可能性を示す。

授業への準備状態に関連して、【9. 実習指導予定時刻を超過した学生の学習活動継続】【17. 教員や学生の実習施設への到着遅延】に着目した。先述した通り、授業として成立するためには、相対的に独立した学習主体としての学習者の活動と教授主体としての教授者の活動とが相互に知的対決を展開する必要がある。しかし、【9】は、学習者が他の学習活動を継続しており、教員が予定していた指導に関する学習活動を展開出来ない状況の中で生じた要因である可能性を示す。また、【17】は、教授者や学習者が不在であり、相互の知的対決を展開するための準備状態が整っていない状況の中で生じた要因である可能性を示す。

以上は、【5】【13】【20】【6】【4】【9】【17】が、《授業成立要件の未充足》という状況の中で教員の日々の実習指導計画の実施が阻害されやすい可能性を示す。この状況への対処に向けて、教員は、教授者としての授業成立要件を満たすとともに、学習者の授業成立要件の充足を支援することが重要であることを示唆する。

第2に、学生への実習指導に携わる看護師に関連していると推測される、【33. 看護師多忙による学生と看護師の相互行為不可】に着目した。実習施設の看護師は、看護ケアの質を維持しつつ、学生が実習目標を達成できるように、看護実践に参画できる機会を提供し、実習環境を調整する役割を有する¹⁴⁾。【33】が表すように、学生が看護師と相互行為を展開できないことは、学生の実習目標の未達成や、学生によるクライアントへの円滑な援助実施に影響する可能性がある。そのため、学生によるクライアントへの援助実施には、学生が看護師との相互行為を通して、看護師からの支

援を獲得する必要がある。これらは、【33】が、看護師からの支援を獲得できない状況の中で生じた要因である可能性を示す。

この状況に関連して、【12. 学生が予定していた援助実施・看護実践場面見学の看護師による先行実施】【23. 実習指導者多忙による学生が予定していた実習指導者との援助実施・看護実践場面見学の不可】【29. 学生の受け持ちクライアント未選定】に着目した。実習指導に携わる看護師の行動に関する研究¹⁵⁾は、実習指導に携わる看護師が、教員の指導計画を予め聞いていたにも関わらずそれを失念し、学生が予定していた援助を実施してしまい学生の学習機会を奪取してしまうという行動を明らかにしていた。また、実習指導に携わる看護師が、学生指導と業務の双方を並進していることを明らかにしていた。これらは、【12】【23】【29】が、実習指導に携わる看護師の学生指導失念や学生指導と業務の並進により、学生が予定していた援助実施や看護実践場面見学、クライアントの選定など学生の学習機会確保への協力が不十分な状況の中で生じた要因である可能性を示す。

学習機会確保への協力不十分に関連して、【14. 実習指導者への依頼不十分による学生が予定していた援助実施・看護実践場面見学不可】に着目した。「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」¹⁶⁾は、実習の学習効果を高めるためには、教員と実習指導者が情報共有等を行い連携する必要があることを示している。また、先行研究¹⁷⁾は、実習指導者からの支援を獲得するために教員が実践している教授活動を明らかにしており、学生への学習機会提供には、実習指導者からの支援獲得に向けた教員の教授活動が必要不可欠であることを示した。これらは、【14】が、教員による実習指導者への依頼が不十分であったために、教員と実習指導者の連携不足が生じ実習指導者からの支援を獲得できなかった状況の中で生じた要因である可能性を示す。

以上は、【33】【12】【23】【14】が、《学習機会確保に向けた看護師からの支援獲得困難》という状況の中で教員の日々の実習指導計画の実施が阻害されやすい可能性を示す。この状況への対処に向けて、教員は、看護師からの支援獲得のために、実習施設との連携・協働体制を構築することが重要であることを示唆する。

第3に、学生の援助実施の対象となるクライアントに関連していると推測される、【2. クライアントの状態変化】【10. クライアントの予定外の退院】に着目した。実習は、学生が、看護を必要とする人々に看護を提供するという性質を持ち、学生の看護の対象となるクライアントの存在が必要不可欠である¹⁸⁾。しかし、クライアントは、学生の援助を受けるために実習の場に存在しているわけではない。実習が行われる場は、病院や在宅療養中のクライアントの自宅や、地域の保健所などであり、そこはクライアントが療養生活を送りながら治療や看護を受けるための場である。そのため、実習中は常に、学生が受け持つクライアントの状態変化に応じた治療や看護の提供を最優先しなければならない。これらは、【2】【10】が、クライアントの状態に応じた看護の提供や治療計画の変更がなされた状況の中で生じた要因である可能性を示す。

この状況に関連して、【19. クライアントの検査・治療と学生が予定していた援助実施の時間重複】【21. 学生が見学を予定していたクライアントの治療時間変更】【18. 学生が予定していた援助と異なるクライアントや家族からの要望優先】に着目した。先述した通り、実習中は常に、クライアントの状態に応じた治療や看護の提供が最優先されなければならない。また、実習における学生を受け入れるクライアントの思いに関する研究¹⁹⁾は、クライアントが学生の行う援助による安心、励まし、感謝を感じる一方、学生への困惑と気遣いをしていることを明らかにしていた。その

ため、教員は、クライアントが学生への気遣いをすることを加味し、【18】が表すようにクライアントや家族の要望を優先する必要がある。これらは、【19】【21】【18】が、クライアントの状態に応じた治療や看護の提供、クライアントや家族の要望を優先する状況の中で生じた要因である可能性を示す。

クライアントの状態や要望の優先に関連して、【7. 実習指導者からの学生の予定していた援助実施への許可獲得不可】【1. 援助実施に必要な学生の準備状態不足】に着目した。実習指導者は、クライアントの援助に責任を持ち、クライアントに焦点をあてた立場で学生指導にあたる²⁰⁾。これは、【7】が、クライアントの援助に責任を持つ実習指導者から学生によるクライアントへの援助実施の許可を得られない状況の中で生じた要因である可能性を示す。また、実習指導を行う教員は、学生が受け持つクライアントへの看護の質を保障するために、学生のクライアントへの援助実施に先立ち、学生の準備状態を査定している²¹⁾。これは、【1】が、クライアントへの看護の質保障という観点に基づき、学生が予定しているクライアントへの援助の準備状態が不足していると教員が判断している状況の中で生じた要因である可能性を示す。これらは、【7】【1】が、実習指導者や教員がクライアントへの看護の質保障に向けた行動をとっている状況の中で生じた要因である可能性を示す。

以上は、【2】【10】【19】【21】【18】【7】【1】が、《クライアントの状態に応じて提供される治療と看護の質保障の優先》という状況の中で教員の日々の実習指導計画の実施が阻害されやすい可能性を示す。この状況への対処に向けて、教員は、クライアントの状態やそれに応じて提供される治療、看護を理解しておくことが重要であることを示唆する。

第4に、教員が指導を担当している他学生に関

連していると推測される、【3. 他学生への実習指導優先】【35. 他学生の体調不良への対応】に着目した。教員は、同時に複数の学生を担当しながら、主に学生個々に指導を行っている。教員が担当する複数の学生は、それぞれに異なるクライアントを受け持ち学習しているため、学生個々の学習状況は異なる。実習中の学生の行動に関する研究²²⁾は、学生が実習目標の達成に向けて、計画的に学習活動を展開する一方、さまざまな問題に直面し、学習活動を停滞、中断させたりしていることを明らかにしていた。この研究結果は、教員が担当する複数の学生の中に、計画的に学習活動を展開する学生もいれば、学習活動が停滞する学生もいることを示す。これらは、【3】が、学習活動が停滞している他学生への対応が必要な状況の中で生じた要因である可能性を示す。また、学生にとって実習は、看護展開に難航する、自身の未熟さを自覚する、クライアントや看護師と関係形成する努力をしない限り実習を円滑に進められない、などストレスの高い授業²³⁾である。それに加え、学生は、実習時間終了後の実習記録の作成や自己学習に時間を要するあまり睡眠時間が減少する²⁴⁾。そのため、実習指導を担当する教員は、講義や演習に比べ、体調不良を訴える学生に遭遇する機会が多く、その際、体調不良により学習活動が停滞した学生への対応が求められる。これらは、【35】が、急遽、学習活動が停滞した他学生への対応が必要な状況の中で生じた要因である可能性を示す。

以上は、【3】【35】が、《他学生の学習活動停滞》という状況の中で教員の日々の実習指導計画の実施が阻害されやすい可能性を示す。この状況への対処に向けて、教員は、指導を担当する各々の学生の学習活動を把握しておくことが重要であることを示唆する。

第5に、指導実施に先立つ教員の教授活動に関連していると推測される【16. 実習指導に向けた

学生の準備状態査定不十分】に着目した。【16】にある「査定」とは、一般的に、調査をして評価を決めることを意味し、教育に関する「評価」とは、学習状況や目標達成度、実践における行動、能力などに関する判断に向けて情報を獲得する過程²⁵⁾である。【16】は、教員が学生の学習状況の評価に基づき事前に指導計画を立案しているものの、教員が指導計画立案時に行った評価と指導直前の評価に相違があった状況の中で生じた要因である可能性を示す。

評価の相違に関連して、【15. 予定していた実習指導内容よりも優先すべき指導内容発生】に着目した。【15】の「実習指導内容よりも優先すべき」には、先述した「評価」の定義に該当する教員の判断が含まれており、この判断は、教員の実習指導直前の評価結果である。これは、【15】が、【16】と同様に、教員が学生の学習状況の評価に基づき事前に指導計画を立案しているものの、教員が指導計画立案時に行った評価と指導直前の評価に相違があった状況の中で生じた要因である可能性を示す。

以上は、【16】【15】が、《指導計画立案時と指導直前の評価相違》という状況の中で教員の日々の実習指導計画の実施が阻害されやすい可能性を示す。この状況への対処に向けて、教員は、評価結果に基づき柔軟に指導計画を変更できるように複数の指導計画を準備しておくことが重要であることを示唆する。

第6に、保健医療福祉施設等において実習を行う学生に関連していると推測される【24. 感染源との隔離に向けた学生と患者の接触機会制限の必要性発生】【34. 学生の関与したインシデントへの対応】【26. 学生へのクライアントのセクシュアルハラスメント】に着目した。実習は、病院や老人保健福祉施設、保育所等の施設において行われ、学生は、免疫力の低い患者や高齢者、子どもなどのクライアントと相互行為を展開することが

多い。このような状況は、学生がクライアントへの感染源となる存在であると同時に、何らかの感染症に罹患するクライアントからの影響を受けやすい存在でもあることを示す²⁶⁾。学生が何らかの感染性疾患に罹患することは、学生の健康を害し、学習を継続できない状況をもたらす可能性が高いため、教員は学生の健康状態にも配慮する必要がある。これらは、【24】が、クライアントとの相互行為に伴う学生の身体的な健康状態への影響に配慮を要する状況の中で生じた要因である可能性を示す。また、インシデントを経験した学生は、負担感や罪責的な負の感情などを知覚²⁷⁾し、精神的な負担を感じやすい。さらに、クライアントからのセクシュアルハラスメントを受けた学生は、その対応に戸惑いや困難を感じており²⁸⁾、適切に対処できない可能性がある。インシデントやセクシュアルハラスメントの経験に伴う精神的負担は、学生の実習中の学習活動のみならず、その後の学習にも影響を与える可能性がある。そのため、教員は、精神的負担を感じている学生を擁護し、学習の継続を支援する必要がある。これらは、【34】【26】が、精神的負担を強いられる学生への擁護を要する状況の中で生じた要因である可能性を示す。

以上は、【34】【26】【24】が、《身体的・精神的な負担を強いられる学生の擁護》という状況の中で教員の日々の実習指導計画の実施が阻害されやすい可能性を示す。この状況への対処に向けて、教員は、学生の身体的・精神的な負担となる事象を理解しておくことが重要であることを示唆する。

第7に、クライアントと相互行為を展開する学生に関連していると推測される【36. 学生のクライアントとの相互行為敬遠】【8. 学生が予定していた援助実施・看護実践場面見学のクライアントや家族からの拒否】に着目した。実習中の学生は、「クライアントの理解難航によるクライアントへの消極的関与」²⁹⁾や、「援助実施に対するクライ

エントからの拒否」³⁰⁾といった問題や困難に直面する。これは、【36】【8】が、学生がクライアントとの相互行為展開上の問題や困難に直面した状況の中で生じた要因である可能性を示す。

以上は、【36】【8】が、《学生のクライアントとの相互行為展開上の問題や困難への直面》という状況の中で教員の日々の実習指導計画の実施が阻害されやすい可能性を示す。この状況への対処に向けて、教員は、学生が直面しやすい問題や困難を理解しておくことが重要であることを示唆する。

第8に、実習指導場所に関連していると推測される、【27. 想定していた実習指導場所確保不可】に着目した。実習中の教員の行動を明らかにした研究³¹⁾は、教員が指導のための空間を確保するなど指導環境の調整を行っていることを明らかにしていた。これは、【27】が、指導環境の調整に不備が生じた状況の中で生じた要因である可能性を示すがある。

指導環境の調整不備に関連して、【28. 実習指導に活用可能な教材入手不可】に着目した。実習は、講義や演習を通して修得した知識や技術を実際のクライアントに提供するところまでを学生に求めるという特徴を持つ³²⁾。すなわち、学生には、講義や演習を通して修得した知識をクライアントの看護実践へ応用することが求められる。しかし、教員の指導内容に関する知識を学生が修得できていない場合には、それを補う必要があり、それには教科書や参考書などの教材の活用が有用である。「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」³³⁾は、効果的な実習の方法として、看護基礎教育機関と実習施設が協力し、実習施設において学生が活用できる図書などを整えるなど、学習環境を充実させる必要があることを示している。これらは、【28】が、学習環境の充実が不十分な状況の中で生じた要因である可能性を示す。

以上は、【27】【28】が、《指導・学習環境の整備不十分》という状況の中で教員の日々の実習指導

計画の実施が阻害されやすい可能性を示す。この状況への対処に向けて、教員は、指導・学習環境を十分に整えておくことが重要であることを示唆する。

第9に、教員の指導計画の推進に関連していると推測される【11. 他教員や実習指導者による実習指導への予期せぬ介入】【25. 実習指導計画に対する上司や実習指導者からの承認不可】【31. 実習指導者の助言時間延長による学生への実習指導時間確保不可】に着目した。実習は、成人看護学、小児看護学、精神看護学などの専門領域に分類されている場合が多い。指導を担当する教員は、特定の専門領域に所属している教員であり、指導担当教員と領域責任者は、当該実習の目標を共通理解しておく必要がある。また、教員は、実習が円滑かつ効果的に進行することを目ざして、実習の具体的な目標を明確にし、実習前や実習中に、協力を依頼する施設の実習指導者に十分な説明を行い、それへの理解を得ておく必要がある³⁴⁾。しかし、【11】【25】【31】は、領域責任者などの他教員や実習指導者に、実習目標やその達成への支援に向けた指導方法の理解を十分に得ることができていない状況の中で生じた要因である可能性を示す。

この状況に関連して、【32. 学生の自己判断による援助の先行実施】に着目した。実習中の学生は、自力では解決できない問題に直面した時、他者に支援を要請するという行動を示す³⁵⁾。【32】は、学生が自力で援助を実施できると判断し、教員に支援を要請することなく、援助を実施した状況の中で生じた要因である可能性を示す。教員が、【32】を日々の実習指導計画の実施を阻害する要因として知覚したのは、この状況において教員が指導を予定していたためである。これらは、【32】が、教員の指導予定が学生に十分に伝わっていない状況の中で生じた要因である可能性を示す。

指導予定の伝達不十分に関連して、【30. 学生が

見学を予定していたクライアントの行動完了】に着目した。入院中のクライアントは、自己対処による問題発生回避や解決に向けて行動している³⁶⁾。【30】は、学生のいないところでクライアントが何らかの問題に直面し、その問題の解決に向けた行動をとったことにより、教員が予定していた指導を行えなくなった状況の中で生じた要因である可能性を示す。学生がクライアントを受け持ち、援助を実施するためには、教員によるクライアントへの説明と同意が必要である。これらは、【30】が、クライアントの行動場面の見学を、教員がクライアントに十分依頼していなかった状況の中で生じた要因である可能性を示す。

以上は、【11】【31】【25】【32】【30】が、《実習に関わる人々への実習目標と指導計画の伝達不足》という状況の中で教員の日々の実習指導計画の実施が阻害されやすい可能性を示す。この状況への対処に向けて、教員は、実習目標や指導計画を実習に関わる人々に理解してもらえよう説明することが重要であることを示唆する。

第10に、教員の職務に関連していると推測される【22. 学内での対応が必要な突発的な事態発生】に着目した。実習指導を担当する教員は、授業や学校運営などに関わる複数の業務を同時に並行して担当している場合が多い。【22】は、実習指導を予定していた教員が、同時に並行して担当している職務に急遽対応せざるを得なくなった状況の中で生じた要因である可能性を示す。これは、【22】が、《教員が並行して担当する職務への余儀なき遂行》という状況の中で教員の日々の実習指導計画の実施が阻害されやすい可能性を示す。この状況への対処に向けて、教員は、他教員や実習指導者と連携することが重要であることを示唆する。

VII. 結 論

1. 教員の日々の実習指導計画の実施を阻害する要因36カテゴリ、すなわち36種類の要因を明らかにした。
2. 教員の日々の実習指導計画の実施は、《授業成立要件の未充足》、《学習機会確保に向けた看護師からの支援獲得困難》、《クライアントの状態に応じて提供される治療と看護の質保障の優先》などの状況の中で阻害されやすい。

VIII. 謝 辞

本研究は、全国の実習指導を担当する看護学教員の皆様のご協力があったからこそ完成できたものである。関わってくださった全ての看護学教員の皆様に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 1) 文部科学省 (2017): 看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～, 1, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf. (令和2年10月20日アクセス)
- 2) 前掲書 1), 4
- 3) 杉森みど里, 舟島なをみ (2016): 看護教育学第6版, 254, 医学書院, 東京
- 4) 舟島なをみ (2014): 看護学教育における授業展開一質の高い講義・演習・実習の実現に向けて, 3, 医学書院, 東京
- 5) 佐藤みつ子, 宇佐美千恵子, 青木康子 (2009): 看護教育における授業設計, 105, 医学書院, 東京
- 6) 廣田登志子, 舟島なをみ, 杉森みど里 (2001): 実習目標達成に向けた教員の行動に関する研

- 究—看護学実習における学生との相互行為場面に焦点をあてて—, 看護教育学研究, 10(1): 1-14
- 7) 小川妙子, 舟島なをみ (1998): 看護学実習における教員の教授活動—学生と患者との相互行為場面における教員行動に焦点を当てて—, 千葉看護学会会誌, 4(1): 54-60
- 8) 山本美津子, 梅村美代志, 菊池麻由美ほか (2003): 成人看護学実習における指導困難状況の要因, 聖母女子短期大学紀要, 16: 75-80
- 9) 舟島なをみ (2018): 看護教育学研究 発見・創造・証明の過程第3版, 204-225, 医学書院, 東京
- 10) Scott, W. A.: Reliability of Content Analysis (1995); The Case of Nominal Scale Coding. Public Opinion Quarterly, 19(3): 321-325
- 11) 吉本 均編 (1978): 現代教授学 (講座現代教育学 5), 61, 福村出版, 東京
- 12) 前掲書 3), 254-255
- 13) 前掲書 4), 5
- 14) 文部科学省 (2020): 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会第二次報告看護学実習ガイドライン: 4
- 15) 伊勢根尚美, 舟島なをみ, 中山登志子 (2017): 看護学実習に携わる看護師の行動に関する研究—病院をフィールドとする実習に焦点を当てて—, 看護教育学研究, 26(1): 39-54
- 16) 厚生労働省 (2011): 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書: 9
- 17) 河内直美, 松田安弘, 山下暢子ほか (2016): 実習指導者からの支援を獲得するために看護学教員が実践している教授活動—実習目標達成に向けて—, 群馬県立県民健康科学大学紀要, 11: 23-48
- 18) 前掲書 3), 266
- 19) 松浦侑子, 岩永喜久子 (2012): 臨地実習で看護学生を受け入れる患者の思い, 日本看護学会論文集看護管理, 42: 549-552
- 20) 厚生労働省 (2003): 看護学教育の在り方に関する検討会報告, 大学における看護実践能力の育成の充実に向けて: 21
- 21) 杉森みどり, 舟島なをみ, 安斎由貴子 (1992): 看護学実習の授業構造の分析, 千葉大学看護学部紀要, 14: 1-6
- 22) 山下暢子, 定廣和香子, 舟島なをみ (2003): 看護学実習における学生行動の概念化, 看護教育学研究, 12(1): 15-28
- 23) 前掲書 3), 265
- 24) 奥百合子, 常田佳代, 小池 敦 (2011): 看護学生の臨地実習におけるストレスと睡眠時間との関連, 岐阜医療科学大学, 5: 59-63
- 25) マリリン H. オーマン, キャスリーン B. ゲイパーソン; 舟島なをみ訳 (2009): 看護学教育における講義・演習・実習の評価, 医学書院, 1, 東京
- 26) 村上弘之 (2007): 看護学生における臨地実習上必要な感染症予防対策, 上武大学看護学部紀要, 2, 1-14
- 27) 有田弥棋子, 田村由美 (2015): インシデントを経験した看護学生へのデブリーフィングの教育的意味—リフレクションの枠組みを活用して—, 日本看護学教育学会誌, 25(2): 15-27
- 28) 清塚 遊, 長谷川真美, 栗原直弥 (2017): 女子看護学生が性別の異なる患者を受け持った時に感じた戸惑い, 東都医療大学紀要, 7(1), 9-17
- 29) 山下暢子, 中山登志子 (2015): 看護学実習中の学生が直面する問題の解明, 看護教育学研究, 24(2): 8-9
- 30) 前田ひとみ, 南家貴美子, 古庄夏香ほか (2013): 看護学生が臨地実習で振り返りたい場面の構造, 熊本大学医学部保健学科紀要, 9: 53-62
- 31) 前掲書 7)
- 32) 前掲書 3)

- 33) 厚生労働省 (2011): 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書: 9
- 34) 文部科学省 (2002): 大学における看護実践能力の育成の充実に向けて—看護学教育の在り方に関する検討会—臨地実習のあり方, 20, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401c.htm#3_1. (令和2年10月20日アクセス)
- 35) 山下暢子, 舟島なをみ (2006): 看護学実習における学生の「行動」と「経験」の関連—行動概念と経験概念のメタ統合を通して—, 看護教育学研究, 15(1): 20-33
- 36) 服部美香, 舟島なをみ (2015): 問題解決場面におけるクライアント行動に関する研究—問題解決に向けた効果的な支援の実現を目指して—, 看護教育学研究, 24(1): 9-24

Factors that Inhibited the Implementation of a Daily Practicum Teaching Plan for Nursing Faculty

Kaori Yuzawa¹⁾, Yasuhiro Matsuda²⁾, Nobuko Yamashita²⁾ and Mika Hattori²⁾

1) Gunma Paz University

2) Gunma Prefectural College of Health Sciences

Objectives: We elucidated factors that may hinder nursing faculties from implementing daily practicum teaching plans in everyday teaching settings, and considered situations where these factors are likely to be encountered.

Methods: Participants were 623 nursing faculties who were instructors for the nursing clinical practicum. Data were collected using a questionnaire and were analyzed using content analysis for nursing education, based on Berelson's methodology.

Results: An analysis of 303 record units generated 36 categories suggesting factors that interfered with practicum teaching plans used daily by nursing faculties. The categories included: "lack of preparation by students which is necessary for nursing faculties to provide support," "changes in the situation of the client," "permission cannot be obtained from the practical training leader for the student's planned assistance," and "the need to limit access opportunities between students and clients for isolation from the source of infection".

Conclusion: The implementation of daily practicum teaching plans for nursing faculty is likely to be hindered in situations such as 《unsatisfied class establishment requirements》 and 《difficulty in obtaining support from nurses to secure learning opportunities for students》.

Keywords: nursing clinical practicum, nursing faculty, practicum teaching plan